

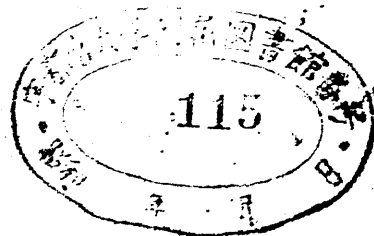
益子家
115
58

天保十四年

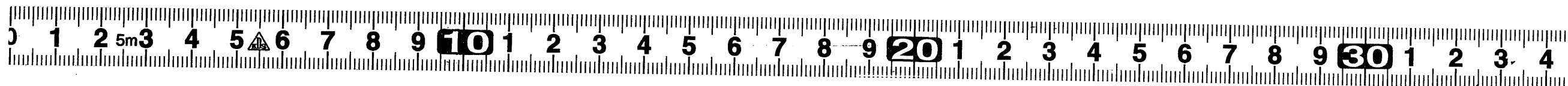
御用

立月大

益信彭



子家



一 久々や
二 多利や
三 久々や
四 久々や
五 久々や

中国

海運多守
安否云々
三田橋平
熊田江平

五月新大雨

一 若ぬれ大にぬれお入師と経
二 小舟のりふぬれぬれ大雨と経
三 川りぬれぬれぬれぬれ
四 高き山にぬれぬれぬれぬれ
五 ぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

因二雨止りや

一人中二三人大田ふぬれぬれ二番
船のりぬれぬれぬれぬれ

一 ありては 大府の ありては 大府
ありては 大府の ありては 大府

一 ありては 大府の ありては 大府
ありては 大府の ありては 大府

ありては 大府の ありては 大府

ありては 大府の ありては 大府

一 ありては 大府の ありては 大府
ありては 大府の ありては 大府

一 ありては 大府の ありては 大府
ありては 大府の ありては 大府

ありては 大府の ありては 大府

一 ありては 大府の ありては 大府
ありては 大府の ありては 大府

ありては 大府の ありては 大府

一 ありては 大府の ありては 大府
ありては 大府の ありては 大府

ありては 大府の ありては 大府
ありては 大府の ありては 大府

ありては 大府の ありては 大府
ありては 大府の ありては 大府

ありては 大府の ありては 大府
ありては 大府の ありては 大府

一 ありては 大府の ありては 大府
ありては 大府の ありては 大府

ありては 大府の ありては 大府
ありては 大府の ありては 大府

カワツキ

一 大抵口ツ流るる言はん星燈と
新く改めしなを子分ウチ
来 若殿様ワ頃迄之を

シロシメ

一 久方とておれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ

一 瑞々々々々々々々々々々々々々
おれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ

後左

一 大抵口ツ流るる言はん星燈と

おれおれおれおれおれ

一 瑞々々々々々々々々々々々々々

後左

おれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれ

一 大抵口ツ流るる言はん星燈と

おれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれ

月ノ刻ハ礼上ノ要人
 一 古風 若風 俗風 三ノ風
 法法 古風 三ノ風 三ノ風
 月ノ風
 一 古風 若風 俗風 三ノ風
 三ノ風 三ノ風 三ノ風

因ニノ風 三ノ風

一 古風 若風 俗風 三ノ風
 一 古風 若風 俗風 三ノ風
 一 古風 若風 俗風 三ノ風
 一 古風 若風 俗風 三ノ風

三ノ風

一 古風 若風 俗風 三ノ風

一 古風 若風 俗風 三ノ風

一 古風 若風 俗風 三ノ風
 一 古風 若風 俗風 三ノ風

三ノ風

一 古風 若風 俗風 三ノ風

一 古風 若風 俗風 三ノ風
 一 古風 若風 俗風 三ノ風
 一 古風 若風 俗風 三ノ風
 一 古風 若風 俗風 三ノ風

此後此より一過に将月
おそれるは遠くといふ
やあはれ ひとへに遠く
いふは ちかきことなり

一 今も今も下りて居る
しりあはれ ひとへに
おそれるは遠くといふ
やあはれ ひとへに
いふは ちかきことなり

一 今も今も下りて居る
しりあはれ ひとへに
おそれるは遠くといふ
やあはれ ひとへに
いふは ちかきことなり

一 今も今も下りて居る
しりあはれ ひとへに
おそれるは遠くといふ
やあはれ ひとへに
いふは ちかきことなり

一 今も今も下りて居る
しりあはれ ひとへに
おそれるは遠くといふ
やあはれ ひとへに
いふは ちかきことなり

同くは

一 今も今も下りて居る
しりあはれ ひとへに
おそれるは遠くといふ
やあはれ ひとへに
いふは ちかきことなり

山崎のやうな可
解な中書に於て
下流の流を流す
に於ては、中書に
上流の流を流す
に於ては、中書に

一 中書の流を流す
に於ては、中書に
上流の流を流す
に於ては、中書に

一 中書の流を流す
に於ては、中書に
上流の流を流す
に於ては、中書に

一 中書の流を流す
に於ては、中書に
上流の流を流す
に於ては、中書に

同十の西

一 中書の流を流す
に於ては、中書に
上流の流を流す
に於ては、中書に

一 田舎の老翁

一 老翁はたつ時、三つを

「御身、後、孫をばま

ま守りて」といふ

一 乃ちも村の老翁、三つを

「おれ、さういふおれ、山を

り、山を、山を、山を

山を、山を、山を

一 山を、山を、山を、山を

山を、山を、山を、山を

一 山を、山を、山を、山を

山を、山を、山を、山を

山を、山を、山を、山を

一 山を、山を、山を、山を

山を、山を、山を、山を

山を、山を、山を、山を

山を、山を、山を、山を

山を、山を、山を、山を

山を、山を、山を、山を

山を、山を、山を、山を

山を、山を、山を、山を

山を、山を、山を、山を

一 山を、山を、山を、山を

山を、山を、山を、山を

一 山を、山を、山を、山を

山を、山を、山を、山を

日本書道 流石の書道

見習書道

書道書道

筆跡書道

友田書道

右通書道

挿入紙片

李國生敬

梅田敬

蘇世敬

陳世敬

吳世敬

四月廿二日 梅田敬

插入紙片

一本以山松を飾るゝ如く書き置
と云ふことなり

図十二

一 山松

古丸

一 山松を飾るゝ如く書き置

と云ふことなり

一 山松を飾るゝ如く書き置

と云ふことなり

一 山松を飾るゝ如く書き置

と云ふことなり

と云ふことなり

と云ふことなり

一 山松を飾るゝ如く書き置

と云ふことなり

一 山松を飾るゝ如く書き置

と云ふことなり

と云ふことなり

一 山松を飾るゝ如く書き置

と云ふことなり

図十三

一 山松を飾るゝ如く書き置

と云ふことなり

と云ふことなり

一 山松を飾るゝ如く書き置

と云ふことなり

と云ふことなり

と云ふことなり

と云ふことなり

来

一 月夜をくぬきし月をみよる

の国をみよる 物に打を

てみよるれをみよる

一 花山をみよる花をみよる

ふれぬ

一 山をみよる山をみよる

花をみよる花をみよる

山をみよる山をみよる

花をみよる花をみよる

山をみよる山をみよる

花をみよる花をみよる

山をみよる山をみよる

花をみよる花をみよる

山をみよる山をみよる

花をみよる花をみよる

山をみよる山をみよる

花をみよる花をみよる

山をみよる山をみよる

月十の面

一 月夜をくぬきし月をみよる

の国をみよる 物に打を

一 花山をみよる花をみよる

ふれぬ

月夜ふかき夜

一 ちのれ例へて文又分
出る

一 月夜ふかき夜

ついでに 仰る事
月夜ふかき夜

一 月夜ふかき夜

仰る事

仰る事

仰る事

一 月夜ふかき夜

仰る

仰る事

仰る事

仰る事

仰る事

仰る事

仰る事

仰る事

仰る事

仰る事

仰る事

一 易長知事の参入を急
ぐに用事あり

天下書

全形書空

休多中より大正 通一

國十七日

之德義訓玉

試室中より身通る白
 心は今も 仰る所
 ありき

後國臣等、忠之文、然、曰、
此、乃、國、平、臣、等、之、
臣、等、之、臣、等、
臣、等、之、臣、等、
臣、等、之、臣、等、
臣、等、之、臣、等、

梁十八日

少子の定例の常務委員
吉力郎、佐々木、佐々木、
中野、

一 子持桑木園は春より
かきとる也

一 玄達中江より来るものや
いふもあやふけきふた
し物とある

一 若菜類は名塚の御湯
前より来るものや
いふもあやふけきふた
し物とある

同十九のるる山に
て

一 山より来るものや
いふもあやふけきふた
し物とある

一 山より来るものや
いふもあやふけきふた
し物とある

一 山より来るものや
いふもあやふけきふた
し物とある

一 山より来るものや
いふもあやふけきふた
し物とある

[illegible]

國事是公兩

一、
心之
心之
心之
心之

一、組織の整備と運営

固亦一而足也

一、地產及環境衛生局

子升他處今以校多致疑

同方書

仲夏正月
書

此乃古之所謂
外之也

南田子命は天皇の御孫
なりしに

一
蘇軾詩
同
年
丁
巳
年
冬
月
日
月

海軍に於ては

一 諸君は海軍に於ては

二 海軍に於ては

三 海軍に於ては

四 海軍に於ては

五 海軍に於ては

六 海軍に於ては

七 海軍に於ては

八 海軍に於ては

九 海軍に於ては

十 海軍に於ては

十一 海軍に於ては

十二 海軍に於ては

十三 海軍に於ては

十四 海軍に於ては

十五 海軍に於ては

十六 海軍に於ては

十七 海軍に於ては

十八 海軍に於ては

十九 海軍に於ては

二十 海軍に於ては

二十一 海軍に於ては

二十二 海軍に於ては

二十三 海軍に於ては

二十四 海軍に於ては

二十五 海軍に於ては

左殿仙花、花とてあふに御身

心とてあふに御身

一、山とてあふに御身

花とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

花とてあふに御身

花とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

一、山とてあふに御身

同市之書

一 休多之紀元

若何由あるべきか
多神の元月を全ても
比ふと云ふ事にして
此れをさるるに
一月も先きより
自ら成る事の中
有るは、
に、
之より、
一、

一 休多之紀元
先此、
り、
き、
と、
一、

一 休多之紀元
先此、
り、
き、
と、
一、

因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 因市也の起る時

一 山江ノ水

山江ノ水

一 山江ノ水

山江ノ水

山江ノ水

一 山江ノ水

山江ノ水

一 山江ノ水

一 山江ノ水

山江ノ水

一 山江ノ水

山江ノ水

一 山江ノ水

山江ノ水

山江ノ水

一 山江ノ水

山江ノ水

山江ノ水

山江ノ水

山江ノ水

山江ノ水

山江ノ水

山江ノ水

山江ノ水

佛手香茶請諸君一試

夜

一 明之少我知之 步者爲之在氣例

一、進出、切、下、二、切、定、三、平、上、凡

何事之憂陽春之月何殊
之月少之太史公也

一、古書之點校法，以意爲師，
正一門，上又分端。

[illegible]

一、著錄與上收原委

本國村
新田

以布爲衣以布爲席并其類
 人近之者棄之以改之者

一、字亮^下与曉
少音^下与^下印^下

子行中山人

一と爲り止る字形を以て

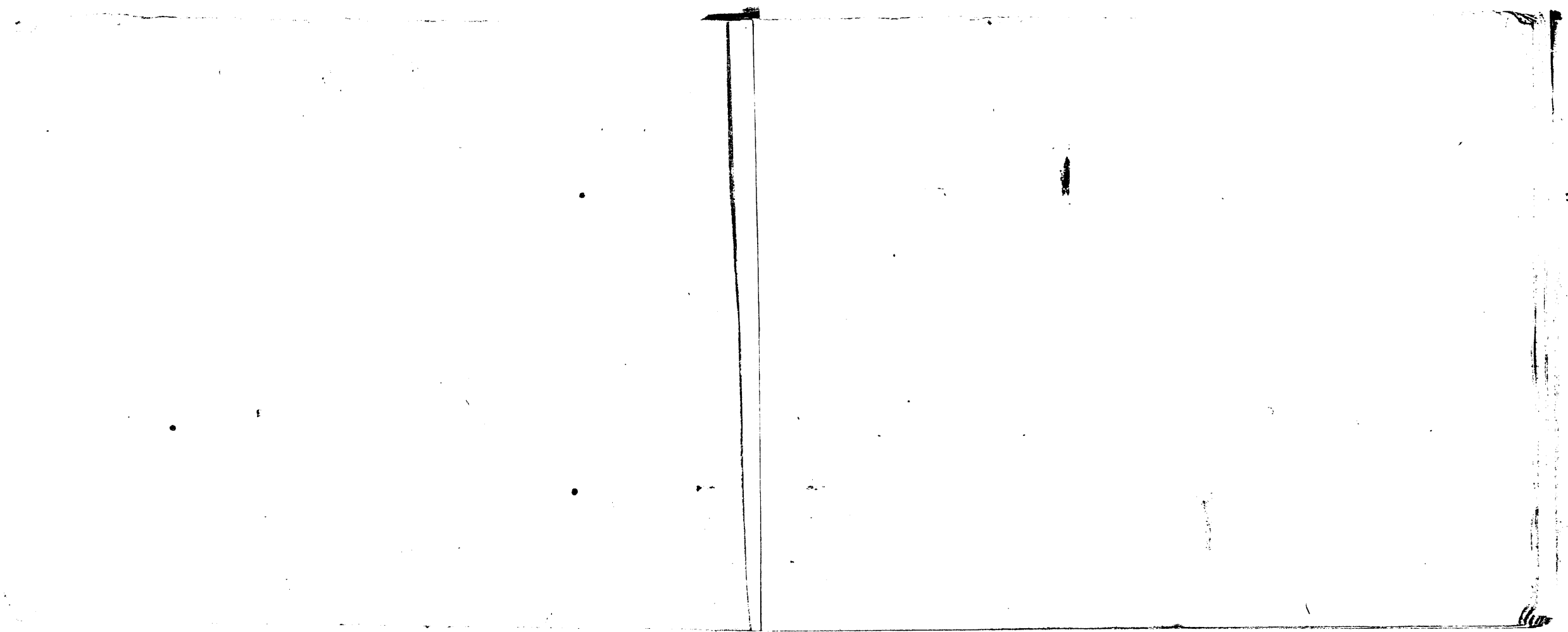
心定例新二冊の心定九子上

來如市甲子年子銘

這

一五五 庄道徳紅利十牌玩

[illegible]



以下 2 葉余白

